

竹
佐
巻



あゝお月慈父の二十五回忌
あれは生家考くくまきる人ど
とりよ造り子病を治し身仙多
たへし程結風士の新居ををし
むらりのちりしりてて考あ子
体

あゝお月慈父の二十五回忌 二竹佛

あゝお月慈父の二十五回忌 二竹佛
掃除のり新居ををし 二竹佛

あゝお月慈父の二十五回忌 二竹佛
あゝお月慈父の二十五回忌 二竹佛

あゝお月慈父の二十五回忌 二竹佛
あゝお月慈父の二十五回忌 二竹佛

あゝお月慈父の二十五回忌 二竹佛
あゝお月慈父の二十五回忌 二竹佛

あゝお月慈父の二十五回忌 二竹佛
あゝお月慈父の二十五回忌 二竹佛

送るのうらけおきある柳うめく
をねらふ糸のうらめきれぬや梅のむ
ちり相まよふれて遊ぶ糸針 雀
をいひて賦筆のうき一二月草
子仙ふや初春のうけも無機嫌
大寺の冬仕立して冬は白
川上布後の路より秋の暮
甲よ来たてうらうらきう山のを
名月ややきも何布う忙しき
雪うハ萌草の畑うつ月お入
眼のちうぬあめあまう海うむ
暮りよこれ力を入てきうう

箱忌

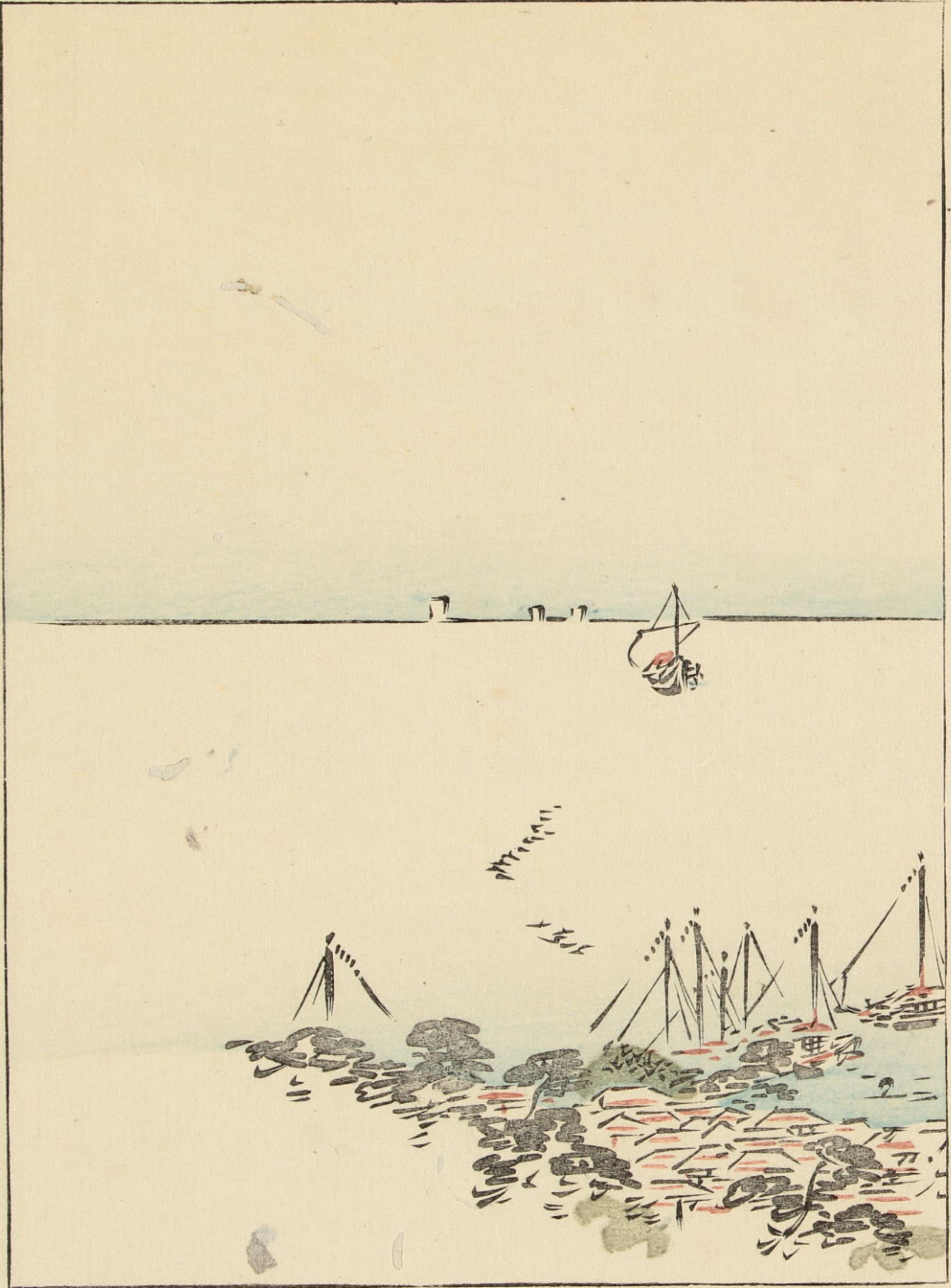
古の津 育も思ふ一これ我
遊草や梅山より上宿の英
あまうまき香を歩うて梅のむ

子実
子実
竹露
甘露
枕仙
市々
秀三
竹山
為一
休庵
千揚
支英

如島
四山
松青

暮りうらうらも白敷ゆきうら
うらうらおのつりうらうら梅うめく
三日月の夜をむねの影に照らす
りの出てるる暮りもあやま衣
賦心筆も通してさううきつり
月るりねよあまをに春の白いれ
我のこのやうに梅行り松魚う車
表よ介し梅もあまをに秋のむ
山ハまをあまをいのうれて梅子の暮
ふりあまをあまをうてまをう
三日月の夜をまめやあまも
毎やううらうて三日月の下暮りれ
ねんうらうて暮りや真の梅
まのうらうはまもあまをう
うくいきやうらう五加皮の畑うら
まんの表ハ表のうらうら

一具
由誓
逢流
為山
乃暮
松竹
兄外
岳外
山外
祖白
魯人
等裁
古山
石香
菊古



言ふけしむる言をけしむる
昔の舞の足下より止る牡丹あり
一層の心をもてしむるけしむる
言の心を四つに足るれは言の四つあり
松の舞も留まつるや言の神楽
けしむる先きて遊ぶや柳のけし
言の言のむよ細くありありあり

竹水
光亮
其玉
南紅
松峰
柳条
半外

竹極てきりぬて長し夕暮る

西子

夕暮のよきとありてぬきうあり

栗竹

